

日韓同形異義漢語の意味の問題

－ 韓国近代資料を中心に －

尹錫南*

(e-mail: ysnw@konyang.ac.kr)

目次

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1. はじめに | 6. 原因分析 |
| 2. 先行研究 | 6.1. 字別の意味と語構造の相違 |
| 3. 調査概要 | 6.2. 多義派生による相違 |
| 4. 意味領域の相違 | 7. まとめ |
| 5. 漢字の多義性と語構成 | |
-

1. はじめに

日韓両国(以降「両国」とする)には、同形漢語が数多く存在しており、意味においてほぼ同じように用いられている場合が多い。しかし、その同形漢語の中には、それぞれの国の事情により全く異なった意味で使用されているもの、また、両国で同義として使われながらも、異なった意味にも使われる場合がある漢語も存在している。

また、両国における漢語は、外来語という概念はほとんどなくそれぞれの母語の語彙の一部を示しているが、同形同義漢語はどれぐらい存在しているのか、実体は、多くの研究者の手によって調べられているが、現在も未だ明らかにはなっていないように思われる。このような両国の同形同義漢語は、韓国人が日本語を学習する際、日本語の理解を助けるものになると考えられる。言い換えれば、学習する際、読み方(発音 又は 音)は異なるものの、その語形によって視覚的になところから簡単に日本語の意味を理解することができるのではないだろうか。しかし、実際の問題として両国の漢語はすべてが同義として使われているわけではなく、様々な理由から、語形は同じであってもその意味において、ずれが見ら

* 建陽大学校 副教授 日本語学

れるものも実際に存在している。そのような意味が異なる同形漢語は、日本語の理解及び言生活において誤解を招くおそれが十分に予想される。そこで本稿では、両国の同形漢語のうち、語形は同じであってもその意味において相違やずれが見られる漢語を同形異義漢語と称し、両国間のずれが見られる二字漢語を中心に、その意味の異同と異義の生じる原因についての分析を試みるものである。

2. 先行研究

両国の同形漢語の意味の問題を取り扱ったものとしては、李漢燮(1984)がある。また、同形異義漢語の問題について書かれたものは、曹喜澈(1991)の論考が最も早いものであろう。

まず、李(1984)は、『日本語教育基本語彙7種比較対照表』(国立研究所(1982))の収録語数6073語を対象に、①日韓同形語がどのくらい存在しているのか、②同形語の中で意味が一致する語の数、③日韓両語に同形語が存在する主な原因は何であるかということについて考察を行っている。『日本語教育基本語彙7種比較対照表』の6073語のうち、漢語は2604語(42.88%)あり、日本語と韓国語との同形語は2450(94.08%)語であった。そして、同じような意味を表す同形語は、2418語(98.69%)であることを明記している。

また、これらの語の語形及び意味が一致する主な原因として、日本語も韓国語も同じ中国語を各々借用したこと、そして、韓国語が日本語を多く受け入れたことなどをあげている。また、李氏はこの論の中で、両国間の同形語の意味に差があるかどうかについても意味領域を五つのグループ¹⁾に分類し考察しているが、異義の生じる原因については触れていない。

同形異義漢語の問題について考察した曹(1991)は、『中国語と対応する漢語』(文化庁。1978)の漢字音読語1882語を対象に、日韓の同形漢語の語義にずれのある語を中心としてその異同の分析を行ったものである。この中で、1882語の日韓漢語のうち、両国でほぼ同じような意味ではあるが、完全な同義ではなく若干のずれがあると考えられる57語、両国における意味が著しく異なるもの29語を抽出し、ずれが生じた原因や漢語の使用されてきた社会的な背景などを考察している。異義の生じている原因として次の六つ、①上昇と下落 ②拡大化と縮小化 ③具体化と抽象化 ④国情の相違 ⑤ニュアンスの相違 ⑥文法的な働きの相違や本義と転義の相違をあげている。

1) 両国間の意味領域による五つのグループは、次の通りである。

- ①意味がほとんど同じである。
- ②日本語での意味領域の方が広く、韓国語の意味は日本語での意味のその一部でしかない語
- ③韓国語での意味領域の方が広く、日本語での意味は韓国語での意味のその一部でしかない語
- ④共通の意味領域もっており、また、それぞれ違う意味も持っている語
- ⑤全く意味領域が異なる語

その他、日韓の同形漢語の量的考察を行った研究には、宋(1993)、塩田(1999)などがある。本稿においては、これらの研究を踏まえながら日韓両国の同形異義漢語の意味の問題に再度光を当て、これまではまた取り上げられていない漢語を中心に分析、考察を行い、論を展開していくことにする。

3. 調査概要

本稿の両国、同形漢語調査では、韓国の近代資料である『少年』(1908~11)と日本の政治小説『雪中梅』(1886)を翻案した韓国の新小説の一つである『雪中梅』(1908)を対象とした。これらの資料を対象とした理由は、先の研究などから見ても、近代、韓国語における日本語の受容問題、語誌的な問題、両国間の漢語の意味の問題などの考察に貴重な資料であると考えられているからである。この二つの資料から、日本語と韓国語に存在している同形漢語(字音語)1808語を抽出した。その中で、同形異義漢語と認められる35語を研究対象とした。(日本語の場合、音読みでも「工夫」「丈夫」など二通りの読み方が存在している語は、一つの語として扱った。)これらの漢語は、現代語においてもよく使われているもので、日本語と韓国語の同形異義漢語と判断してもよいと考えられる。ここで言う同形異義漢語とは、両国で使われている漢字表記の語のうち、「貸切、引出」など、日本語としては訓読みされている語を除き、両国で字音されている語(字音語)のみを指すものである。

また、両国の同形異義漢語の意味記述は主に、日本の『日本国語大辞典第2版』(小学館)と韓国の『새우리말큰사전』(삼성당출판)によるものである。しかし、近代以前の語釈もあり、現代における意味と用法を調べる必要があることから、日本の『新明解辞典第4版』(1991)、『岩波国語辞典第6版』(2005)と韓国の『東亞新国語辞典』(1991)、『朝鮮語大辞典』(1986)の語釈と用法を参考にした。また、これらの辞書を参考にするにあたり以下の点に注意しながら考察を行うことにする。

- ①両国の辞典の語義記述は辞書の語釈であり、実際に使用されているかどうか
- ②文語体・口語体などの違い
- ③両国間で様々な面において違いがみられる語も存在している

4. 意味領域の相違

本稿で用いる意味領域については、李(1984)の両国間の意味領域の5つのグループ

を参考にして、「①意味がほとんど同じである」を除いた四つのグループを用いることにした。四つのグループは以下のとおりである。

- ①意味領域の全く異なるもの
- ②同義の意味もあり、異なった意味でも使われる
- ③日本語の意味領域が広く、韓国語の意味はその一部に限定されるもの
- ④韓国語の意味領域が広く、日本語の意味はその一部に限定されるもの

上記の四つのグループに、調査概要で述べた方法を用いて得られた同形異義漢語を、日本語と韓国語それぞれの辞書的意味記述から分析した結果で分類する。

但し、同形異義漢語と一言でいっても先もふれたように両国間における文語的、口語的な違い、または、ニュアンスの違いなども考えられる。つまり、この四つの意味領域の分類も現代的な用法によって左右される可能性がある。本稿においても、どの領域に属するかという明確な判断を下しにくい漢語も多く存在しており、上記の①～④の分類についてはあくまでも、参考としての分類作業を示したものである。

① 意味領域の全く異なるもの

	日本語の意味	韓国語の意味
悪毒	健康や生命を損なうもの。毒	凶悪なこと。悪辣でたちの悪いこと。
寒心	心配などで肝を冷やすこと。心におそれを抱いて、ぞっとすること	嘆かわしい。情けない。哀れだ。みじめだ。
口舌	コウゼツ①くちとした。②ものいい。口先。弁舌。クゼツ 嫉妬による男女の間の言い争い。口げんか。	非難の言葉。そしりのことば。
工夫	クフウ ①いろいろ考えてよい方法を得ようとする。また、考えついた方法。②精神の修養に心を用いること。コウフ 道路・土木・鉄道・電信・電話・ガス・水道などの工事に従事する労働者。	技術を習い覚えること。勉強。学ぶこと。
作事	家屋などを造ったり修理したりすること。普請。建築。	仕事の間を作ること。仕事を作り出すこと。
丁寧	注意深く心がゆきとどくこと。また、てあつく礼儀正しいこと。	(副詞)間違いなく、必ず。きっと。
多幸	①しあわせの多いこと。多福。②(心)身体の軽さなどの体感を含む、快を伴う気分	幸い、幸運、思いがけずうまくいくこと。 (副)幸いに、うまくあいに

② 同義の意味もあり、異なった意味でも使われる

	両国、共通の意味	日本語の意味	韓国語の意味
一体	①一つの体。同一体。②一つになって分けられない関係にあること。同類。③一つの様式、体裁。一つの体。	①仏像、彫像などの一個の称。②(副詞)おしなべて。総じて。③(疑問の意を強く表す語)本当に。④(接統詞)そもそも。	いつも同じ調子であること。一様であること。
遺物	①先代の人類が後代に残したもの。遺品。②昔のもので現在まで残っているもの。遺跡から出た大昔の品物など。	①忘れ物。落とし物。遺失物。②(比喩的に)時代遅れの物事。	(比喩的に)昔、通用された制度や理念などがすでにその効力を失い、使う道がなくなったこと。
是非	是と非。道理にかなうこととかなわぬこと。善し悪し。	①よしあしの判断・批評。②(副詞)どうあっても。きっと。	是非を論ずること。善悪を論ずる。言い争い。
大事	重大な事件。普通でないこと。大事↔小事。	①(一大事の略)出家して悟りを開くこと。②容易でないこと。危ういこと。③かけがえのないものとして大切に扱うべきさま。④重要。肝要。	大札の俗語。冠婚葬祭の行事。
発明	①物事の正しい道理を知り、明らかにすること。②機械・器機類、あるいは方法・技術などをはじめて考案すること。	賢いこと。聡明。伶俐。	(罪がないと)弁明すること。
放心	他の事物に心をうばわれてぼんやりすること。心が身に添わないこと。	心にかけないこと。放念。	油断すること。

③ 日本語の意味領域の方が広く、韓国語の意味はその一部に限定されるもの

	両国、共通の意味	日本語の意味
意趣	心の向かうところ。考え。意向	①意地。無理を通そうとすること。②理由。わけ。③恨みを含むこと。恨み。
一新	すっかり新しくなること。すべてのことを新しくすること。	明治維新をさす。御一新
穏当	穏やかで、道理に当てはまっていること。	柔順で人に逆らわないさま。のんびりしているさま。おとなしいこと。
仮装	①仮の扮装。②相手を欺くため、偽り装うこと。	仮の装備。仮装巡洋艦。
結構	かまえてつくること。組み立てること。	①申し分ないこと。よいこと。②気だてのよいこと。③これ以上は望まないこと。十分。④

		(副詞)何とか。まあまあ。
行李	旅行の荷物。旅行用の荷物入れ。	①使者。②軍隊の戦闘または宿営に必要な弾薬・糧秣・器具などを運ぶ部隊。
丈夫	ジョウフ①一人前の男。②心身ともにすぐれた男。大丈夫。③夫。	ジョウブ ①元気であるさま。②しっかりしていてこわれにくいさま。堅固。③たしかなさま。確実なさま。
天気	空模様。気象状態。	①晴天。②天子の気色。天皇の機嫌。
心中	シンチュウ ころのうち、胸中。	シンジュウ ①人に対して義理を立てること。②相愛の男女がその真実を相手に示す証拠。③相愛の男女がいっしょに自殺すること。④転じて、一般に二人以上のものがともに死を遂げること。⑤比喩的に、打ち込んでいる仕事や組織などと運命をともにすること。
大丈夫	立派な男子。丈夫をほめていう語。	①しっかりしているさま。ごく堅固なさま。②(副詞)まちがいがなく。たしかに。
得意	自分の気持ちにかなうこと。また、目的を達して満足していること。	①自分の気持ちを理解する人。親しい人。②自信があり、また、十分になれていること。③ひいきすること。また、その人。④いつも取引する先方。得意先。顧客。⑤自信を持って誇らしげに振る舞うこと。盛んに自慢すること。

④韓国語の意味領域の方が広く、日本語の意味はその一部に限定されるもの

	両国、共通の意味	韓国語の意味
看守	①見守ること。また、その人。②刑務所・拘置所などにおいて巡視・警備、その他監獄事務に従事する法務事務官。	(鉄道)の踏切番。
外面	うわべ。外側。	①(顔を合わせたくないために)顔をそらすこと、そっぽをむくこと。②みすてること。③ある思想や理論、現実、事実、心理などを認めないで、度外視すること。
俗談	俗間の話。世間話。。⇔雅談	諺。俗諺。
名節	名誉と節操。	①節句。②祝祭日。③名分と節義。
地境	土地の境目	(ある種の)立場。瀬戸際。境地。境遇。
滋味	①うまい味わい。②滋養のある食物。	재미[jemi]①おもしろさ。興味。②(主に보다<見るの意>とともに)成果、満足。③(商

		売の儲け、稼ぎ、景気。④(挨拶として生活の状態を尋ねて)調子、具合、様子。
境遇	生活していく上での、その人の環境や立場。まわりあわせ。境涯。	場合、時。事情、状況。
物件	物品、品物、土地、建物など、不動産をいう。	①一定の形態をなしているあらゆる物質的な存在。品物。物品。②抜きん出たもの。傑物。
分数	数学用語	①自分の身分にあった程度の身のほど；分際。②分別。

以上、両国の同形異義漢語を意味領域の相違によって分類したが、上記の表を見てもわかるように両国間の意味が全く異なる漢語は少ない。このことから、両国に存在している多くの漢語は、中国漢籍にその典拠があることがうかがわれる²⁾。そしてこれらの漢語は、それぞれの国の歴史的、社会的事情によって中国で使われていた本来の意味を変化させ、ある漢語は本来の意味を失い、また、あるものは本義とは全く違う意味として使われるようになったと考えられる。つまり、日本と韓国それぞれの異なった社会的背景が、同義だった言葉に独自の意味・用法を与え、それぞれの言語生活に適応させるような語彙の変化をもたらしたと推測できる。これらの漢語の語義変化、あるいは、意味の多義派生の原因の究明は、語別的な考察を通してより明らかになってくると思われる。

5. 漢字の多義性と語構成

上記の両国における同形異義漢語の意味記述を見ると、殆どの語には、二つ以上の意味があり、その結果、両国間の異義が生じていると考えられるが、実のところ、どのようにして語義の変化が生じたのかという問いに対する答えは、語別的な面からの分析・考察を行い、明らかにしていくより他はない。曹(1991)による両国間の異義が生じる要因分析からも分かるように、語別的な面からの原因究明は可能であると思われる。しかし、本稿で注目したいのは、池上(1969)³⁾でも述べてあるように、意味変化の要素の中で指摘している多

2) 本稿で考察する漢語の中国漢籍の典拠は、『大漢和辞典』(大修館書店、1984)と『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、1990)によって、漢籍の典拠の有無を調べた。

3) 池上嘉彦(1969, pp225-269)『言語と意味』によると、一般的な言語の意味変化を促進する要素としてとりわけ重要なものとして ①言語というものはある世代から次の世代へ不連続なやり方で伝達されるものである。②意味の不明確さということも意味変化の原因である。③意味変化をもたらすもう一つの要因は有契性の消失ということである。④多義性の存在は言語に柔軟さという要素をもたらす。⑤曖昧なコンテキストがきっかけとなって意味変化が起こることがよくある。⑥意味変化を支配する一般的な要因でおそらく最も重要なものは語彙の構造ということであろう。なお、意味変化の原因として

義性による意味変化と語彙の構造による意味変化である。特に漢語においては、中国典拠の語にせよ、日本製漢語にせよ、はじめは、一つあるいは二つの意味しかもっていなかったはずである。それが、時代が進んでいくにつれて、様々な理由によって多義化や、意味の変化が起こってきたと考えられる。本来、漢語の構造は、中国の語構成によって作られたものであり、両国においても中国の語構成に習って新しい漢語を作り出したと考えられる。一方、二字以上の漢語の構造を見ると、漢字一つ一つの意味には、漢字一字に意味一つと対応しているわけではなく、一字の漢字に少なくとも二つ以上の意味が存在しており、この二つ以上の意味をもつことが豊富な漢語の造語力をつながっているわけである。例えば、両国の「外面」という漢語を挙げて具体的に説明すると、両国で同義として使われる意味に「うわべ。そとがわ」がある。これは、「外」には、「そと」の意があり、「面」は、「物事のうわべ」の意で、二字の語構造は連体修飾関係にある語である。しかし、韓国語の「外面」には、「面と向かうことを嫌って、顔をそむくこと」とそこから「ある思想や理論、などを認めないで、度外視すること」の抽象的な意味として使われている。この場合、韓国語の「外」という字を、「とおぎける」の意味で解釈すべきであり、「面」の意味は“つら、かお”の意味となる。このように、同じ表記の二字漢語でありながら、漢字一字一字の意味が異なり、語構造も客体、補足関係にたつ語である。

先に述べた「外面」ように、漢語、特に二字漢語を構成している漢字一字一字の意味を個別（字別）に意識しながら、その意味的結合と文法的相互関係による漢語の語構成上の性格を分析することで、両国の同形異義漢語の原因分析が可能になるのではないかと考えた。

まず、二字漢語の語構成の結合パターンの先行研究として、斎賀(1957)、佐藤(1979)、林(1987)、野村(1988)、張(1989)らが挙げられる。これらの先行研究において二字漢語の語構成が明らかにされている⁴⁾。しかし、野村(1988)は、現代語におけるすべての漢語がこの分類におさまるかという、決してそうではないことを指摘しながら、次のような問題点を挙げている。

現代語の二字漢語を分析するには、さまざまな困難が予想される。その最大のものは、現代語では、二字漢語が複合語であるという語構成意識がほとんどうすれてしまったことであ

①言語的原因、②歴史的原因、③心理的原因、④心理的原因、⑤意味変化の原因としての外国語の影響、⑥意味変化の原因としての新しい名称に対する必要性をあげており、その意味変化の結果として、①意味範囲の変化(意味の拡大と縮小)、②評価の変化(墜落的傾向と向上)をあげている。

4) 二字漢語の語構成の先行研究に基づいて、以下の分類を行なった。

①二字の意味の結合が主・述関係にたつ語②二字の意味結合が連体修飾関係にある語③二字の意味結合が連用修飾関係にある語④二字の意味結合が客体・補足関係にある語⑤同義・類義的な二字の結合による一義形成をなす語⑥類義的または対義的な二字の結合で並列対照を示す語

る。このことは、形態の面からも、意味の面からもたしかめられる。スルをとまってサ行動詞を構成したり、いわゆる形容動詞の語幹となったりするほか、文の成分となったり、他の言語単位と結合したりする点で、二字漢語は、単純語とほとんどかわりがない。意味の面でも<中略>「討論」と「討議」のような類義語で、多少のニュアンスの差があるとしてもその違いが語構成上の問題だと意識するひとは、ほとんどいない⁵⁾。

と述べている。また、林(1987)では、漢字使用の意識の底にあるものとして、

わたしたち現代日本人が話したり書いたりするために漢語を用いる場合、その漢語に用いられている漢字の意味を字別に意識することが、多くの場合、行われているだろう。<中略>こういうふうには、漢語を使う際、多くの人の意識のそこに存在するとおぼしいことばを仮定し、これに、漢字の基底語という名を与えたい。漢語の基底語といわず、漢字の基底語というのは、漢語を、一字一字の漢字に還元して、それをあることばに置き換える習慣が、目下のところでは、まだ、日本人の間に、かなり行きわっていると思うからである⁶⁾。

と述べており、おおまかに、漢字の基底語のありかたを分類している⁷⁾。

このような両氏の諸説に従い、同形異義漢語の語構成を分析し、漢字一字一字の意味の認識の問題、語構成の問題として分類できない語について、本稿では、単純語として扱うことにする。

もう一つの理由として考えられるのは、それぞれの国において多義派生によって異義が生じていることである。多義語とは、意味的に関連づけられる二つ以上の意味を持つ語である。また、多義派生の型として①転移、②比喩的転義、③部分転義、④推論的転義、⑤アスペクトの違いが挙げられている⁸⁾。

両国の同形異義漢語の中にも多義派生によって意味の相違が見られる語があるはずで、たとえば、日本語の「意趣」という語は、“考え。意向”の意味で両国において用いられているが、一方で、日本語では他に、“意地、理由、わけ、恨み”の意味が存在している。この“意地、理由、わけ、恨み”という意味用法は本来の意味からの転義と見るべきであろう。また、韓国では「遺物」という語を日本語との同義以外に、“使う道がなくなった

5) 野村雅昭(1988, p.45)「二字漢語の構造」『日本語学5月』明治書院

6) 林四郎(1987, pp36-38)「漢字基底語考」による。

7) ①一字一字に基底語がはっきりしている場合②一字の基底語ははっきりしているが、もう一字の方は基底語をもつまでにいたらず、基底意味をもつにとどまる場合③一字の基底語ははっきりしているが、もう一字の方には、基底意味すら想定しにくい場合④一字一字に基底意味があり、ともに基底語までは設定しがたい場合⑤一字に基底意味が考えられ、他の字には基底が考えられない場合⑥一字一字にすると、どの字にも、基底語も基底意味もなく、できあがりの語にのみ意味がある場合

8) 国広哲也(1986, pp5-9)「語義研究の問題点—多義語を中心として—」(『日本語学9月vol5』)

こと”という抽象的意味で用いることがある。これは、本来の意味からの比喩的転義と考えられる。

このように、同形異義漢語の語構成面と多義派生の問題によって両国の意味の相違が生じる漢語についての原因分析を行うことにする。

6. 原因分析

6.1. 字別の意味と語構造の相違

両国の同形異義漢語の異義の発生の理由として、両国の漢語一字一字の意味の違いや、二字の意味結合の語構造の違いによるものがあることを先に述べた。ここからは、両国の同形異義漢語の漢字一字一字の意味と語構造の組み合わせの語例を見ていくことにする。

(1) 語構成の面においては同義であるが、字別の意味の違いによるもの

寒心

(日) 心配などで肝を冷やすこと。心におそれを抱いて、ぞっとすること。

(韓) 嘆かわしい。情けない。哀れだ。みじめだ

아버지를 잃고 그 집안의 살아갈 길이 한심(寒心)하다.

(父親を失ったその家の行末(先々のこと)が哀れで気の毒だ。9)

일이 터진 뒤에야 우왕좌왕하는 꼴이란 참으로 한심(寒心)한 노릇이다.

(ことが起きてから右往左往するありさまは、誠に情けない始末だ。)

両国の「寒心」という漢語の意味は、連体修飾関係の語構造をなしているが、両国で、まったく違う意味に使われている。日本語の意味は、中国漢籍の本来の意味で、やや文語的ではあるが、「寒」の字に“おののく。ぞっとする”という意味を表していると思われる。一方、韓国語の場合は、中国漢籍の意味では使われず、独自の意味として現代語においても一般的に使われている。おそらく、「寒」の字の意味として“なやむ”“さびしい”といった意味に解釈できそうである。

多幸

(日) しあわせの多いこと。

(韓) ① 幸い、幸運。② (副詞) 幸いに、うまいぐあいに。

다행이 이詩一篇을 엮어들어(幸いこの詩一編を耳にし、)

9) 韓国語の用例は、辞書の用例であり、日本語の訳は、筆者が行なった。

数年만에 多幸이 故国배를 만나 還国함을, (何年ぶりに幸い、祖国の船にあり、国へ帰ることになり、)

日本語の意味として“ご多幸をお祈りします”のようなやや硬い表現で使われることが多い。「幸」の字の意味はは、“しあわせ”であり、連体修飾関係の語である。しかし、近代資料の用例から韓国語の用法を見てみると、「幸」の字の意味として“さいわい”のという意味があり、「多」の字の意味も“ありがたい”の意味にとることができる。従って、この「多幸」は連体修飾関係の語であるといえる。

仮装

(日・韓)①仮の扮装。②偽り装うこと。

(日)仮の装備。仮装巡洋艦。

両国、同義として使われている「仮装」は、それぞれ、①は連体修飾関係、②は連用修飾関係にたつ意味であろう。しかし、日本語のみの意味を見ると、「装」の字の語義として、“設備”の意味を表していると考えられる。

その他、「遺物」という語の二字の意味結合を、両国で使われている同義の面から見てみると、「遺」の字に‘のこす’の意を当てて、連体修飾関係の語構成をなしている。一方、日本独自の意味として存在している“遺失物”の語構成は、連体修飾関係にある語だが、「遺」の字には‘わすれる、すてる’という意味が込められている。

(2)語構成の相違と字別の意味の違いによるもの

外面(日・韓)うわべ。外側。

(韓)①(顔を合わせたくないために)顔をそらすこと。そっぽをむくこと。

②みすてること。③ある思想や理論、現実、事実、心理などを認めないで、度外視すること。

①길에서 만나도 외면(外面)하고 인사도 하지 않는다.(道であっても顔をそらして挨拶もしない。)

②불쌍한 고아들을 외면(外面)할 수 없었다.(かわいそうな孤児たちを見捨てておくことはできなかった。)

③그의 획기적인 이론은 당대에는 외면(外面)을 당했다.

(彼の画期的な理論は、当時代には、無視(度外視)されてしまった。)

両国の同義として使われている「外面」は、「外」の字に「そと」、「面」の字に

は、「物事のうわべ」という意味の結合による連体修飾関係をなしている。一方、韓国語の意味を見てみると、「面」の字の意味に「顔」、そして「外」の字の意味には、「はずす」「とおぎける」といった動詞の意味も存在しており、その二字の意味結合は、客体・補足関係の意味として構成されている。このような用法から、③の抽象的な使い方も生まれてきたものと考えられる。

悪毒

(日)健康や生命を損なうもの。毒。

(韓)凶悪なこと。悪辣でたちの悪いこと。

奸詐한 사람 残忍한 사람 怪惡한 사람 虚為한 사람 惡毒한 나라
凶殘한 사람들이
強한者는 弱한者를 삼키되 凶殘하고 惡毒하야

「悪毒」という語は中国の漢籍の典拠はなく、日本語と韓国語では全く違う意味で使われている。日本語の場合、現代語としては廃語になってしまい、使われなくなっているものの、『日国第2版』(小学館)の用例を見ると、近世、近代初期の用例があがっている。その二字の意味結合は、連体修飾関係の語としてとることができるが、韓国語には、日本語としての意味はない。韓国語では「毒」の字に「わるい」「いたむ」という意味があり、二字の語構造は、類義的な組み合わせによる一義形成の語として考えるべきであろう。

名節(日・韓)名誉と節操。

(韓)①節句。②祝祭日③名分と節義。

오늘은 秋夕이란 큰 名節이라 山에나 들에나 어문아해업시(今日はお盆という盛大なお節句だから、山にも野原にも大人、子供を問わず)

어린이날은 어린이들의 명절(名節)이다 (こどもの日は、子供の祝祭日である)

両国、同義として使われている「名節」という語の、「名」には、「誉れ」、「節」には、「みさお」の意味が込められている。その二字の意味結合は、並列対照の関係にある。両国においてやや文語的な表現であり、現代語としてはあまり使われていない語のようである。しかし、韓国語のみに存在している意味の①②は、現代語でも一般的に使われており、二字の意味結合を見てみると、「節」の字の意味意識として「祝いの日、祝日」という言葉が容易に考えられる。それに比べ、「名」の字の適当意味は考えにくいことから、このような語は単純語として扱うべきだろう。もし、ここであえて「名」の字に意味を与えるとすれば、「なのる」という言葉を当て、客体・補足関係の語構造でみるべきであろうか。

(3)単純語の意味による相違

口舌

- (日)コウゼツ①くちとした。②ものいい。口先。弁舌。
クゼツ 嫉妬による男女の間の言い争い。口げんか。
(韓)非難のことば。そしりのことば。

日本語における「口舌」という語は読みが複数存在し、「コウゼツ」と読んだ場合の意味では、並列対照を示す構造と考えられる。また、「クゼツ」と読んだ場合には、「口説」という表記もあり、本義からの転義としてもとれそうな意味となる。

一方、韓国語の「口舌」は字別の意味構造としての判断が難しいため単純語として見るべきであろう。「口舌数(人から悪口やそしりを受ける羽目)」といった派生語のほうが一般的に使われていることを考えると、この「口舌数」の省略から出た語であるのかどうか今後の検討を要する。

丁寧

- (日)注意深く心が行きとどくこと。また、てあつく礼儀正しいこと。
(韓)(副詞)ほんとうに。間違いなく、必ず、きっと。

両国で、ごく一般的に使われている漢語であるが、韓国語では、日本語の「丁重」にあたる意味として使われている。日本語の「丁寧」は、それぞれの漢字に「ねんごろ」の意味があり、類義による一義形成の意味と判断することが可能だ。しかし、韓国語の「丁寧」は、“너의 생각이 정녕(丁寧) 그렇다면 그렇게 하도록 하자(君の考えが本当にそうであるならばそうすることにしよう)”などの使い方、副詞としての意味でしか使われず、二字の語構造は、単純語として見たほうが適切であろう。

結構(日・韓)かまえてつくること。組み立てること。

- (日)①申し分ないこと。よいこと。②気だてのよいこと。③これ以上は望まないこと。十分。④(副詞)何とか。まあまあ。

両国、同義としての「結構」は連用修飾関係の意味を表しており、韓国語でも“단편 소설의 결구(結構)”のように使われているが、日本語の“申し分ない”などのような副詞的な意味としては使われていない。日本語の意味を二字の語構成から考えることは難しく、単純語と判断すべきだと考える。

一体(日・韓)①一つのからだ。同体。②一つの体裁・様式。③(副詞)総じて。

(日)(副詞)(疑問の語を伴って)全くわからないような時に、疑問の気持を強く表す語。

両国、同義としての「一体」の語構造は連体修飾関係にあるが、日本語の副詞的な意味を表す用法は、韓国語には存在していない。漢字二字の字義からは、その語構成を考えるのは難しく、単純語と判断するべき語であろう。

作事

(日)家屋などを造ったり修理したりすること。普請。建築。

(韓)仕事の間を作ること。仕事を作り出すこと。

その他、「作事」という語は両国で全く違う意味に使われているが、字別の語義としての意味は同じである。しかし、日本語における語構造は、連体修飾の関係として成り立っており、韓国語の語構造では、客体・補足関係にある語と考えられる。このように、表記が同じであっても両国それぞれの語構造の違いが見られる語も存在する。

6.2. 多義派生による相違

まず、多義派生による両国間の同形異義漢語が生じる理由として、(1)本義から転用された転義による相違、(2)本義からの比喩的な意味による相違によるものであると思われる。金田一(1988)によると、本義と転義との関係について、

語は本来の意味を源としてさまざまな意味に派生していくわけであるが、それによって歴史的な意味の意向ないしは交代現象が起これば、意味変化が生じたと捉える。意味の派生のしかたは語ごとに際があって一律には行かないが、その多くは意味の転用による。〈中略〉このように意味の転用は、その語が本来指している対象や作用・概念が持つある特徴からの連想として拡大使用されることである。

と述べており、その連想類推のあり方にはおよそ、①形態の類似、②共感的な連想から、③機能・性質・状況の類似から、④主体・対象の拡大使用、⑤意味の一般化・抽象化、⑥語の象徴的用法のような場合があるという¹⁰⁾。

以下、両国の同形異義漢語の本義から転用された転義による相違が認められる語と、本義からの比喩的な意味による相違が認められる語について語例を見ることにする。

¹⁰⁾ 金田一春彦 他編(1988, pp393-395)『日本語百科大事典』によった。

(1) 本義から転用された転義による相違

是非

- (共通)是と非。道理にかなうこととかなわないこと。善し悪し。
- (日) ①よしあしの判断・批評。②(副詞)どうあっても。きっと。
- (韓) 是非を論ずること。善悪を論ずる。言い争い。

「是非」は、類義的または対義的な二字の意味結合で並列対照の構造を持ち、本義として使われる。しかし、日本語の①、②の意味は、本義からの転義といえよう。また、韓国語には、その意味はなく、“그는 아무 하거나 시비(是非)를 한다.(彼は誰とでも是非を論ずる)、둘 사이에 시비가 일어난다.(二人の間に言い争いが起こる)”のような“言い争い、文句をつける”という意味で使われ、本義よりも転義の方が、より一般的に用いられている傾向がある。

放心

- (日・韓)他の事物に心をうばわれてぼんやりすること。心が身に添わないこと。(日)心にかけないこと。放念。(韓)油断すること。

「放心」という語は、二字の意味結合が客体・補足関係にある語構造を持つ。本義は、両国、同義であるが、日本語の‘心にかけないこと’と韓国語の‘油断すること’の意味は、本義からの転用された意味と捉えるべきであろう。

(2)本義からの比喩的な意味による相違によるもの

ここでいう比喩的な意味というのは、慣用句などに見られる比喩の意味、あるいは文による比喩表現のことを意味しているわけではない。上記の本義と転義と連想類似の中で、その事物と機能や性質、状態などが類似しているところから連想された比喩をさして比喩の意味と狭義的に捉えたものである。両国の同形漢語の中には、一方の国で本義からの比喩的な意味が生じており、その結果、同形異義漢語になった場合が存在する。

遺物

- (共通)①先代の人類が後代に残したもの。遺品。②昔のもので現在まで残っているもの。遺跡から出た大昔の品物など。
- (日)①忘れ物。落とし物。遺失物。②時代遅れの物事。
- (韓)昔、通用された制度や理念などがすでにその効力を失い、使う道がなくなったこと。

「遺物」の本義は、語構成の面では、連体修飾関係にたつ意味合いで、両国、同義であるが、それぞれの国で、本義からの比喩的な意味にも使われることで、多義語となったと考えられる。

この他、「心中」という語は、日本語の「シンチュウ」の意味としては日韓同義であるが、「シンジュウ」の意味は、韓国語では使われない。この多義性を表している「シンジュウ」の意味は、本義からの転義として“一般に二人以上のものがともに死を遂げること”の意が生まれ、この転義から比喩的な意味として“打ち込んでいる仕事や組織などと運命をともにすること”という意味にも使われるようになったのではないかと考えられる。

このように、両国における同形異義漢語の異義発生要因について、字別の語義意識と語構成上、多義派生という二つの側面から見てきた。今回、分析に用いた分類が、すべての同形異義漢語に当てはまるものかという点を決してそうではないように思う。従って、今後研究を行っていくうえで、より分類方法を検討する必要がある。

7. まとめ

以上、韓国近代資料を対象に、両国の同形異義漢語を抽出し、その意味領域と同形異義漢語が生じる原因分析を行ってきた。まず、同形異義漢語の意味領域の分類は、先行研究の分類とほぼ同様である。次に、両国の同形漢語の異義が生じている要因を字別の語義意識と多義派生の観点から試みた。そして、分析、考察を行った結果、次のようなことが明らかになった。漢字一字一字の字義意識と語構造の側面から同形異義漢語を見ると、①字別の意味及び語構成上の相違によるもの、②語構成の相違によるもの、③単純語の意味の相違によるものという違いが見られる。このような違いから異義が生じたと考えられる。

また、多義派生の原因としては、①本義からの転義による相違、②本義からの比喩的な意味による相違があげられる。

今回の結果は、近代資料から得られた35語という限られた同形異義漢語を対象にして得られたものであり、両国における現代語の同形異義漢語のすべてが今回得られた結果に当てはまるとは言いきれない。今後は、より多くの同形異義漢語を調査するとともに、歴史的、文化的な要因など、多角的な視点からの語別的な研究が必要となるだろう。

【参考文献】

<論文・単行本類>

- 張世俊(1989) 『완전국어』 図書出版博文閣、p.248
池上嘉彦訳(1969) 『言語と意味』 大修館書店、pp.225-269
国広哲弥(1986) 「語義研究の問題点」 『日本学9 5』 明治書院、pp.5-9
塩田雄大(1999) 「日本・韓国・中国の専門用語 —日本語とはどのくらい似ているか—」
『国文学解釈と鑑賞 第64巻1号』 SHIBUNDO
宋永彬(1993) 「『分類語彙表』」による日韓基本語彙の対照」 『早稲田大学大学院文学
研究科紀要 文学・芸術編』 別冊20
曹喜澈(1991) 「日韓同形漢語の語義・用法の相違」 『日本近代語研究』 近代語研究会
斎賀秀夫(1957) 「語構成の特質」 『講座現代国語学』 (岩淵悦太郎監修) 筑摩書房、
p.145
佐藤喜代治(1979) 『日本語の漢語』 角川書店、pp.96-102
野村雅昭(1988) 「二字漢語の構造」 『日本語学5月』 明治書院、p.45
林四郎(1987) 『漢字・語彙・文章の研究へ』 明治書院、pp. 36-38
李漢燮(1884) 「日韓同形の漢字表記語彙」 『日本語学』 3-8明治書院

<辞書類>

- 신기철·신용철편저(1974) 『새우리말 큰사전 상,하』 삼성당출판
大阪外国語大学朝鮮語研究室編(1985) 『朝鮮語大辞典 上・下』 角川書店
金田一春彦 他編(1988) 『日本語百科大事典』 大修館書店
日本国語大辞典第二版編集委員会(2001) 『日本国語大辞典第二版』 小学館
諸橋徹次著(1984) 『大漢和辞典』 大修館書店
漢語大詞典編輯委員会(1990) 『漢語大詞典』 漢語大詞典出版社

要 旨

日韓両国(以降「両国」とする)には、同形漢語が数多く存在しており、意味においてほぼ同じように用いられている場合が多い。しかし、その同形漢語の中には、それぞれの国の事情により全く異なった意味で使用されているもの、また、両国で同義として使われながらも、異なった意味にも使われる場合がある漢語も存在している。本稿は、先行研究を踏まえながら韓国の近代資料を対象に日本語と韓国語に存在している同形漢語(字音語)1808語を抽出した。その中で、同形異義漢語と認められる35語を研究対象とした。先ず、異義性の見られる漢語を漢字の持っている漢字一字一字の字義と語構造の面と多義派生からの分析を行った結果をここに示す。漢字一字一字の字義意識と語構造によるものとしては、①字別の意味及び語構成上の相違によるもの、②語構成の相違によるもの、③単純語の意味によって異義が生じていると考えられる。また、多義派生の原因からは、①本義からの転義による相違、②本義からの比喩的な意味による相違があげられる。この結果は、近代資料から得られた35語の少ない同形異義漢語を対象に得られた結果であり、すべての同形異義漢語に当てはまるものではないように思われる。従って、今後研究を行なっていくうえで、より分類方法の検討が必要であり、多くの同形異義漢語を調査対象とし、歴史的、文化的な要因など、さまざまな方向から語別的な研究により、より明確な要因分析できると考えられる。

キーワード：同形異義漢語 字音語 本義と転義 比喩表現 単純語 語構成
多義派生

투 고 : 2012. 8. 31
1차 심사 : 2012. 9. 15
2차 심사 : 2012. 10. 6